がんばれ名古屋商人！

この地図は、愛知県立図書館所蔵の「宝暦十二午改名護屋路見大図」を元に作成した。この地図は、宝暦 12 年(1762年)に作成されたものだ。

城下町名古屋を感じさせる町名あれこれ

【本町】名古屋と熱田とを結ぶメインストリート。本町通りを、藩主は参勤交代で江戸への往来に使った。その時には見送りや出迎えの藩士で通りは満ちあふれていた。外国からの賓客である朝鮮通信使や琉球使節の一行も、本町通りを通った。本町通りの両側には、名古屋を代表する商家が軒を並べていた。商人の夢は、本町通りに店を構えることであった。

【伝馬町】名古屋第一の交通の要地、伝馬町には問屋場が置かれていた。常備の人足百人、伝馬百匹で美濃路、飯田街道、上街道、下街道をゆく旅人の便をはかっていた。江戸と名古屋との書状や荷物の取扱いをする飛脚は、江戸まで七日間で荷物や書状を届けた。本町通と伝馬町筋との交差地点には、高札が建っていて、札の辻と呼ばれた。現在の錦一・二丁目。

【茶屋町】茶屋町は、豪商茶屋中島氏が居宅を構えていたので、その屋号にちなんで付けられた。茶屋氏に劣らず繁栄したのが、松坂屋の前身、いとう呉服店を開いた伊藤次郎左衛門家だ。現在は丸の内二丁目。

【京町】京都から清須へ移住してきた商人が多かったので京町と呼ばれるようになった。裕福な商家が軒を並べていた。薬種商の町。現在は丸の内三丁目。

【玉屋町】旧東海銀行本店の場所。

【蒲焼町】築城手伝いの人夫を相手にした茶店が並び、蒲焼を売っていたからという説がある。現在はネオンもまばゆい夜の錦三丁目。

【鉄砲町】本町通、蒲焼町より入江町までの二丁。清須越の町で、清須の町で鉄砲を製造する職人が住んでいたので、鉄砲町と名づけられた。現在の錦二・三丁目、栄二・三丁目。

【主税町(ちからまち)】清洲越しの時、「野呂瀬主税」と言う人が始めて住んだことから、彼の名をとって付けたと言われている。

【水主町(かこまち)】尾張藩の水軍、千賀氏が居住していた。

【木挽町(こびきちょう)】名古屋城を築城するにあたり、木挽小屋がこの地に建てられたので、木挽職人(材木を大鋸で挽くことを業とする人)が定住するようになり、木挽町という町名ができあがった。現在は丸の内一丁目。

【武平町(ぶへいちょう)】検地を行なった普請奉行の松井武兵衛は、武平町という町名により、四百年後もその名を残した。

【両替町】藩の御用両替商平田家が住んでいたので両替町と呼ばれた。現在は愛知県産業貿易会館のあるところで丸の内三丁目。

【上材木町】上材木町は、正万寺町筋の西にある南北道路の杉の町筋より伝馬町筋の間。堀川の舟運を利用して、木曽の桧などの良材が運ばれてきた。藩では上材木町、下材木町、元材木町の三ヵ町に居住する業者に限り、材木屋の称号を許した。現在は丸の内一丁目、錦一丁目。

【八百屋町】長者町通のうち、鶴重町筋から横三ツ蔵筋までの間をいう。野菜を商う人々が多く住んでいたところから八百屋町と呼ばれた。現在の錦二丁目、栄二丁目。

【瀬戸物町】瀬戸物町は清須から移住してきた町。町名の由来は清須で、瀬戸物屋が多く住んでいたからだ。現在の丸の内三丁目。

【皆戸町】戸障子襖等を造る職人町で、家ごとに皆戸を作るゆえに、皆戸町と呼ばれた。現在の丸の内一丁目、錦一丁目。

【関鍛冶町】美濃の関の鍛冶職人が清須に移住し、その職人が名古屋で住んでいた町が関鍛冶町。現在の丸の内三丁目。

【万屋町】古手物を商う雑多な商人が住んでいるので万屋町と呼ばれた。現在の丸の内一・二丁目。

【桶屋町】清須の桶屋町が名古屋に移住し、旧号を用い桶屋町と称した。町名の由来は清須時代、町内に家持桶師孫左衛門という者が居住していたからである。現在の錦二丁目。

【その時名古屋は　九代藩主宗睦が財政再建で悪戦苦闘】

徳川宗睦(むねちか)は、宝暦11年(1761年)に九代藩主になった。財政は、宗睦の代になると、再び赤字に転落し、宝暦12年には１万両の赤字に陥った。宗睦は、藩の行政機構にメスを入れたが、財政は好転しなかった。明和２年(1765年)に庄内川が決壊した。藩は明和３年、幕府に２万両の貸与を請うた。また富商から２２万両の調達金を課した。藩は、ここで「米切手」という名の藩札の発行を決めた。この「米切手」の発行は、兌換準備金なしの空手形だった。商人に対して「米切手」の通用を藩内で奨励するとともに、城下の富商を「御勝手方御用達」に任命し、富商の経済力を拠り所として「米切手」の信用維持に努めた。

【名古屋商人の歴史は清須越しから始まった】

名古屋のまちづくりは、慶長15年(1610年)の名古屋城築城と清須からの町ぐるみの移転に始まった。名古屋の商人街は「碁盤割」といい、本町を中心に整備された。尾張に集まった初期の町人は、穀物屋、紙問屋、油問屋、塩問屋、茶問屋、魚問屋など生活必需品を扱う商人や、鍛冶屋、とぎ師、さや師、金具屋、塗物師など武具関係の職人や、大工・紺屋・畳刺・桶屋など武士の日常生活を支える職人たちだった。商人は、そのルーツによって主に３種類に区分できる。第一は「清須越し」といい、清須から移ってきた店だ。松坂屋の伊藤次郎左衛門家も、その１つ。第二は、駿河から移ってきた商人だ。藩主・義直が駿河からお国入りされた際に、付いてきた。第三は、各地から移ってきた商人だ。小間物呉服屋・十一屋小出庄兵衛家(丸栄百貨店)も、その１つ。

【名古屋を襲った巨大地震の歴史】

名古屋を襲った巨大な地震は、有史以来５回発生している。そして、巨大地震の後には再度大きな地震が起きている。大地震は有史以来５回発生しているが、そのうち４回はその直後から２年以内に巨大地震が起きている。

①「東海東山道地震」(天正13年･1586年)発生、その19年後の慶長９年(1605年)に「慶長地震」(東海･東南海･南海地震、同時発生･死者5千人以上)が発生。

②「元禄地震」(元禄16年･1703年)発生、その4年後宝永4年(1707年)に「宝永地震」(東海･東南海･南海地震、同時発生･死者2万人以上)が発生。

③「安政東海地震」(安政元年･1854年)発生、その32時間後(1854年･安政元年)に「安政南海地震」が発生。

④「東南海地震」(昭和19年･1944年)発生、その2年後(昭和21年･1946年)に「昭和南海地震」が 発生。

北見式賃金研究所　社会保険労務士法人北見事務所　所長　北見昌朗
〒452-0805 名古屋市西区市場木町478　電話 052（505）6237　http://www.tingin.jp/　講演をご依頼下さい！

■主な著書：「愛知千年企業　江戸時代編 幕末を生き抜いた名古屋商人に学ぶ」中日新聞社
「愛知千年企業　明治時代編」(予定)・「愛知千年企業　大正時代編」(予定)・「名古屋の街を歩く」(予定)

非売品